

Sport  
Godzilla®

# スポーツゴジラ®

〔第44号〕

「ゴジラ」は東宝株式会社の登録商標です。  
『スポーツゴジラ』は、日本スポーツ学会が  
商標使用の許諾を受け、スポーツネット  
ワークジャパンが発行しています。

2	第44号を発刊するにあたり	長田 渚左
	■特集■	
	ラグビーに心をこめて	
4	直前! W杯シンポジウム ラグビーワールドカップを10倍楽しむ! 村上晃一、永田洋光、玉木正之、大友信彦、生島淳	阿部 <sup>構成</sup> 雄輔
16	釜石にはサイン『13』があった —— 洞口 孝治	大友 信彦
23	いつも戦略は見えていた —— 宿澤 広朗	永田 洋光
31	タックルを信じ続けた —— 石塚 武生	大元 よしき
37	「超」の付く負けず嫌いだから、知恵を絞った —— 上田 昭夫	生島 淳
43	ボールの奪い合い、それは自由の奪い合い —— 平尾 誠二	玉木 正之
14	2020年オリパラ大会への署名のお願い	
51	夢劇場『馬』No.17「中村屋の栗まんじゅう」	長田 渚左
52	バックナンバーのご案内	

【表紙イラスト】 南 伸坊

スポーツネットワークジャパンHP <http://sportsnetworkjapan.com/>

『スポーツゴジラ』は、種目を問わずスポーツそのものの魅力や  
価値を語るスポーツ総合誌（フリーペーパー）です。

## 第44号を発刊するにあたり

編集長 長田 渚左



ラグビーを特集したいと考えていた。

一方で、どんな角度から、どのように光を当てればラグビーの本質を伝えられるのか。その答えを長い間、見つけられなかった。

ところが、あるきっかけで、崇高なラグビー精神の代名詞「ブローサイドの精神」という言葉が、メイド・イン・ジャパンであることを知った。

試合終了後、対戦チームとお互いを讃え合い、一緒に風呂に入り、唄を歌い、酒を酌み交わす……友情を育む特別な時間を心から愛する。それを「ブローサイドの精神」と名付けたのは日本人だった(詳しくはスポーツゴジラ39号に松瀬学氏が寄稿した『ブローサイド精神』は日本固有文化だった』を参照下さい) それは日本人が、ラグビーという競技とともに、

その精神を、本場の国以上に理解して、大切にしている証しだと思う。きっとラグビーというスポーツの本質が、日本人の心の奥底にあるものと共鳴して、伝承されてきたのだろう。

その精神の伝承者たる強靱な男たちを思い浮かべると、意外にも早世の方が多くことに心が止まった。

9月20日に開幕するワールドカップ日本大会を、彼らもまた天国で待ち望んでいるに違いない。

スポーツゴジラ44号はラグビーと「ブローサイド精神」を心から愛した彼らに光を当て、あらためて哀悼の意を表します。

洞口孝治 1999年没(享年45)

宿澤広朗 2006年没(〃) 55)

石塚武生 2009年没(〃) 57)

上田昭夫 2015年没(〃) 62)

平尾誠二 2016年没(〃) 53)

ワールドカップの日本代表に、きっと彼らのスピリットが受け継がれているはず。

ご協賛およびご協力企業・団体



人と社会を支える力



立ちどまらない保険。

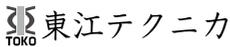


三井住友海上



株式会社東美物流

日本ハンドボールリーグ機構



(順不同)



—— 9月20日、ラグビーワールドカップが開幕します。オリンピックやサッカーのワールドカップとどこが違うのでしょうか？

**玉木** ラグビーはもともとはクラブ同士の親睦のために行っていて、試合が終わったらノーサイドでパーティーをやって親交を深めるのが大事なんです。お互いに招き合うのでホーム&アウェイが原則で、だから第三国に集まって世界一を決めるワールドカップのような形式は必要ないという考えが長く続いていきましたが、やっぱり世界大会をやりたいという声が高まって1987年に第1回大会が行われ、今回が9回目。初めての日本開催です。

**永田** イギリスでサッカーのルールが定められたのが1863年。8年後の1871年にラグビーのルールが定められました。当時はラグビー式のフットボールの方が人気があつたんですが、ここでサッカー界が大博打を打つんです。現存する世界最古のカップ戦、FAカップの開催です。それまでサッカー

ラグビーに心をこめて



# 直前! RWCシンポジウム ラグビーワールドカップを 10倍楽しむ!

司会=長田渚左

村上晃一、永田洋光、玉木正之、大友信彦、生島淳(写真左から)

1987年に第1回大会が行われ、いまやオリンピック、サッカーの世界カップに次ぐビッグスポーツイベントに成長したラグビーワールドカップ(RWC)が9月20日、開幕する。前回大会で南アフリカを相手にスポーツ史上最大の番狂わせと言われた勝利を挙げた日本代表への期待が高まる中、世界と日本のラグビーを見続けてきた5人のベテランジャーナリストが語り合う。

もホーム&アウェイが原則だったんですけど、初めて同レベルの下でどこが一番強いかを決める大会をやった。これでサッカー人気が爆発してヨーロッパ大陸にまで普及していきます。それに腹を立てたラグビー界は、じゃあ俺たちはずっとホーム&アウェイで行く、第三国でテストマッチはやらないぞと。それがサッカーの世界カップ開始からラグビーの世界カップ開始まで57年も時間が空いてしまった理由だと考えられます。

## ジャパンの強さは本物が

——7月25日のフィジー戦に34-21、8月3日のトンガ戦に41-7と快勝しました。日本代表は本当に強くなつたんでしょうか?

村上 1991年の第2回大会でジンバブエから初勝利を挙げて以来ひとつも勝てなかったジャパンが4年前一気に3勝を挙げたのは、勿論そこまでの積み上げもありましたがやはりヘッドコーチのエデ



村上晃一(むらかみこういち)

1965年、京都市生まれ。10歳から京都ラグビースクールでラグビーを始め、山口良治氏らの指導を受ける。府立鴨沂高、大阪体育大ではCTB/FBでプレー。87年、ベースボール・マガジン社に入社し、「ラグビーマガジン」編集部勤務。90～97年、同誌編集長を務める。98年に同社を退社し、「J-Sports」のラグビー解説者に。近著に『ラグビーが教えてくれること』(あかね書房)

イ・ジョーンズが激しい練習をしたからですね。エディさんが戦法、戦術を決めて、反復練習をひたすら重ねて勝ち取ったのが15年の3勝でした。

今回はそこからさらにレベルアップしています。15年はほぼエディさんに言われた通りでしたが、19年のジャパンは自分たちで考え、判断しながらボールを動かしている。そしてボールの動かし方が効率的になりました。たとえば15年の南ア戦の最後のトライのところでは、リーチマイケル(FI)があつちでボールを持って走りこつちでボールを持って走ると、動き回っていましたよね。簡単に言うとなん年19年はボールを持った人間が走っていたのに対し、19年

はボールが走っている。

**永田** 私はずっとジェイミー・ジェセフ日本代表へツドコーチのラグビーを批判してきました。彼がやりたいラグビーも分かるけど、パスで育った日本人がボールを手放しちやつて大丈夫かっていう疑問があつたんですが、フィジー戦を見て安心と言うか、良いなと思つたポイントが二、三ありました。ラインアウトが完璧に取れたこととタックルの場面で下がつてないこと。ラファエレティモシー(CTB)、ウィリアム・トゥポウ(CTB)が無謀なプレーをしなかつたこと。タックルされても無理矢理パスでつながないでラックにしていた。チームの意思統一を含めかなり仕上がっていると感じました。

### ファンズのマインドを二変させた南ア戦の勝利

—— プールステージで日本はロシア、アイルランド、サモア、スコットランドと総当たりで戦つて、2位以内に入つて決勝トーナメント進出を目指しま

日本代表、プールステージの試合日程

対戦相手	キックオフ日時	開催地
ロシア	9月20日(金)19:45	東京スタジアム
アイルランド	9月28日(土)16:15	エコパスタジアム
サモア	10月5日(土)19:30	豊田スタジアム
スコットランド	10月13日(日)19:45	横浜国際総合競技場

す。  
村上 リーチなんかは初戦のロシア戦が一番大事だと言っていますが、僕は第2戦のアイルランド戦がターゲットだと思いますね。ロシアもフィジカルが強くて油断したら怖い相手なんです、まあロシアには負けないです。

**永田** サモアはどうですか。今回サモアは予選で苦しんで、結局プレイオフに回ってドイツに勝って出場権を獲得したんですけど、それが突然本大会で化けたりどうしようという心配もありますね。  
**村上** 僕ら昔から見ている人間にはサモアは強いっていう印象があります。ワールドカップには7回出場して、そのすべての大会で勝利を挙げている国です

から、向こうが格上という先入観がある。でも今のジャパンの選手やファンはそんなことまったく思っていないんです。サモアに負けるなんて考えてない。そういうメンタリテイになっちゃったんです。

**永田** 僕たちの世代は、「ジンバブエに勝つてから南アフリカに勝つまでに24年かかった」とか思っているけど、今のファンは南アフリカに勝ったところからスタートしているから。

**生島** そこがBC(紀元前)、AD(紀元後)の分かれ目ですね。2015年の南アフリカ戦の勝利で日本のラグビーマンのマインドセットが劇的に変わりました。去年ジャパンがオールブラックスとやっていた時、後半何分かでトドメのトライを取られたんですが、その瞬間味の素スタジアムがシーンとなった。「あ、ファンは本気でオールブラックスに勝てると思ってるよ」と気がつきました。

——日本と世界の注目選手を挙げてください。  
**生島** 僕はトンブソンルーク(L.O)。38歳ですが



永田洋光(ながた・ひろみつ)

亡父が予科練の体育の授業でラグビーを経験。ポジションはHOだった。都立新宿高でラグビーを始めるが2年生の夏、コーチの「お前は3番」のひと言で以後引退まで最前列でスクラムを組みラックの下敷きとなる日々を重ねた(プロフィールは23ページ)。

トンガ戦でもこぼれ球とか、ぜんぶ彼が取ってるんじゃないかっていうぐらいの大活躍でした。

**玉木** 大阪弁がええですね。応援したくなりますね。僕は福岡堅樹選手(WTB)の走りを見たい。今までもよく走るラグビー選手、日本にいましたけど、力強さは1ランク、2ランク上行ってますね。

**永田** 僕も福岡選手です。フィジーとかトンガとかアイランダー系のタックルって痛いんです。よく脳震盪起こしたりするんですけど、フィジー戦で福岡選手、ハイタックル食らってるのに普通に走り続けていました。速い選手はいっぱいいたし華麗なステップの選手もいたけど、あの細い体で何であんなに

体幹が強くてあれだけ走れるんだろうか。

**村上** 僕はトンブソンを書き直して中村亮土(CTB)にしました。田村優(SO)がゲームメイクをするポジションなんですけど、中村も一緒になってゲームをコントロールしているキーマンだったことがフィジー戦でよく分かりました。

### 成熟し均質化が進む世界のラグビー

**大友** 僕は堀江翔太(HO)です。彼の別世界に生きていくような感じ、ちょっとフワフワしている感じが頼もしい。日本開催でいろんなプレッシャーがあつて、ジェイミーなんか一昨年ぐらいからもうプレッシャーかかって大変なんですけれども、多分そういうところを救ってくれるのが堀江選手。

**村上** 世界の注目選手いきましようか。僕はマルコム・マークス(HO||南ア)。分かりやすくすごい選手です。ボール持って走るし、相手のボール取るし、タックルする、トライするスーパーマンです。



生島淳(いくしまじゅん)

小学校1年の時に近鉄vs早大の日本選手権をテレビ観戦して以来憧れだった早大に入学し、日比野弘教授の「ラグビー実技」を受講。日曜日の補講でHOとしてフル出場しトライを記録。東伏見グラウンドに青春の刻印を記した(プロフィールは37ページ)。

**永田** 私はオーウェン・ファレル(SO)イングランド)です。前回大会でイングランドは自国開催なのにプールステージで敗退して、ヒーローになり損ねた男です。ロンドンのヤンキーみたいな顔で、プレスキックを蹴る前のガン飛ばすみたいなルーティーンにぜひ注目してください。ゲームリダーとしては非常に優秀なんだけど、キャプテンにしたのはどうかっていう論評もあるらしい。

**生島** 私はマロ・イトジェ(LO)イングランド)です。彼が出てきた時、ロックの概念を変えるんじゃないかと思つたぐらいの運動量、力強さで。まだちよつとケンカつばやいところもあつたりして。

**大友** 変化球ですがジェームズ・オコーナー(FB、SO)オーストラリア)を。2008年に史上最年少の17歳でスーパーラグビーにデビューして、18歳でワラビーズ入りして、11年のワールドカップで大活躍したあと転落の一途をたどつて。

**村上** 今回はイスラエル・フオラウ(FB)オーストラリア)が人種差別発言でクビになったので、FBのポジションがひとつ空いたんです。

**大友** 最終的に出られるかどうか分からないけれど、もしワールドカップでプレーしたら、ひとつの走り、ひとつの

プールステージ組み合わせ ( )内は8月19日時点の世界ランキング

プールA	プールB	プールC	プールD
アイルランド(3)	ニュージーランド(2)	イングランド(5)	オーストラリア(6)
スコットランド(8)	南アフリカ(4)	フランス(7)	ウェールズ(1)
日本(9)	イタリア(13)	アルゼンチン(11)	ジョージア(12)
ロシア(20)	ナミビア(23)	アメリカ(14)	フィジー(10)
サモア(16)	カナダ(21)	トンガ(15)	ウルグアイ(19)



大友信彦(おおとも・のぶひこ)

宮城県気仙沼の中学・高校生時代、新日鐵釜石V7に遭遇。早大に通うも就職活動に全敗し、編集プロダクションのアルバイトからなし崩しにライター稼業に。駆け出しのフリーライターに温かかったのはラグビー選手だけだった(プロフィールは16ページ)。

キックにも物語を感じそうです。

**玉木** 私は日本代表と戦う時にこの人を止めて勝利して欲しいという意味で、アイルランドのSHコーナー・マレーを挙げます。

**村上** とにかくアイルランドはマレーとジョン・セクストン(SH)のハーフ団ですからね。この2人にプレッシャーかけて動かさないようにすれば、ジャパンの勝利の確率が上がるのは間違いない。——そのほか今回の見どころは？ 昔の日本はとにかく低いタックルが代名詞でしたが。

**村上** オフロードパスつてタックルされながらパスする技術があつて、フィジーなんか低いタックル

入ったら、オフロードパスでぜんぶポンポンポンつながれます。だから肘や上腕とかを押さえてパスさせないようにするというふうには、ただ低く行けば良いってもんじゃなくなってきた。これは日本のFWの選手のフィジカルが上がったから可能になつたんですね。姫野和樹(FL、LO)の筋量とかもうすぐくつて、腕が前脚みたいですよ。

**生島** 4年前と各国トライを取るパターンが変わってきています。たとえばエディさんはサッカーの研究に熱心で、今のイングランドのラグビーはマンチエスターシティの戦術に影響を受けています。いかに高い位置で相手のボールを奪うかつて発想です。

### BC(紀元前)を知るがゆえに悲観的な予想も

**村上** ジャパンのコーチのトニー・ブラウンは、今回はキックが多くなると予想しています。ディフェンスが発達して、横に揺さぶるだけだとなかなか隙間が空かないので、後ろに蹴って相手を走らせて、



玉木正之 (たまき・まさゆき)

京都祇園で電器屋を営む実家に身長185cmぐらいの青年が水道のメーターを測りに来ると、姉や隣家の畳屋の娘が妙にソワソワするのに気づいたのは小学校3年の頃。当時の関西社会人の強豪・京都市役所のラグビー選手だった(プロフィールは43ページ)。

縦と横に動かして相手のディフェンスを崩していく。永田 近年サッカーのラグビー化、ラグビーのサッカー化が進んでいます。スペースのつくり合いですね。ボールを動かしながら自分たちが意図したところにスペースを空けるように相手のディフェンスを動かす。単純にパスとかキックだけじゃなくて、誰をいつ前におびき出そうとしているのか、相手の誰を弱いと思つてそこに誰をぶつけようとしているのか、そういうふうに見ると面白いですよ。

大友 世界中のラグビーが均質化してきていますよね。ワールドカップが定期的に行われるようになって、コーチが南半球から北半球へほとんど行って、

戦術的な部分じゃほぼ差がなくなって、選手の意識も向上した。アイルランドなんか昔は試合の中でもいっぱい波があつたのが、ニュージーランド人コーチのジョー・シュミットが行つてから、80分間同じトーンで戦うようになった。

玉木 選手のスピード、パワーがものすごく上がつて、これ以上速く動けと言われても動けないし、これ以上強くなれと言われてもなれないレベルにまで来ている。さらにお互いの戦術も手の内もだいたい分かっている。そういう中で今回誰が、どの国が新しいものを見せてくれるか。難しいテーマですが。

——最後に優勝国と日本の成績を予想してください。

村上 優勝はニュージーランド。日本はプールステージを勝ち抜いて、準々決勝でニュージーランドに敗れて3勝2敗と予想します。

玉木 私は日本優勝です。NHKで五郎丸さんがそう言っていました。私は五郎丸さんにインタビュー

ーしたことがあって、最高に素晴らしい人だと思っ  
ているので、あの人の言うことを信じます（笑）。

**大友** 私も日本優勝です。前回南アフリカに勝った  
ことで研究されているし、今度は相手もナメてこな  
いからそんなにうまく行くわけないって、BCの人  
間としてはそう考える一方で、やっぱりあそこでメ  
ンタルバリアをどれだけ破ったか。あの後のテスト  
マッチでは、格上ともほぼ互角に戦ってますからね。

### ラクビースピリットに則った世界レベルの応援を

**生島** 去年沖縄でエディさんが高校生相手にクリニ  
ックをした時に、「11月2日はチケットを買いなさい。  
私たちが優勝します」と宣言したんで、優勝は  
イングランド。ジャパンのことはBC魂が強すぎて  
よく分かんないんですけど、アイルランドに勝って  
スコットランドに惜敗して、3勝1敗で3国が並ぶ  
というのが今日の時点でのシナリオです。

**永田** ジャパンが強いとボジティブに信じるのは選

手とコーチだけで良い。ファンは4戦全敗を前提に  
見た方が良いでしょう。それでロシアに勝ったら嬉  
しいし、アイルランドに勝ったらさらに嬉しいじゃ  
ないですか。優勝予想はイングランドです。

**村上** 最後にひと言加えると、4年前にジャパンが  
南アフリカに勝った時、試合が終わった瞬間に南ア  
のサポーターが日本の勝利を祝福して握手してくれ  
ました。日本のファンにもこれができるようになって  
欲しい。負けた時にさっと相手を祝福する。それ  
がラグビースピリットです。

**永田** 地元のイギリスの人たちもわれわれに、「お  
めでとう」「すごかった」と言ってくれて大変嬉し  
かったですね。今回たとえばロシアやナミビアが歴  
史的勝利を挙げたら、選手やサポーターに惜しみな  
く「おめでとう」を言ってもらってください。

本稿は2019年8月5日、東京都中央区FROM ONE  
SPORTS BASEで行われた第118回「スポーツ  
を語り合う会」のシンポジウムをもとに構成しました。

## 第10回 日本スポーツ学会大賞 決定!

### 受賞者 林 敏之 氏

(元ラグビー日本代表、特定非営利活動法人ヒーローズ会長)

今年度の受賞者は、子ども世代へのラグビー普及と育成に長く尽力されている、元ラグビー日本代表の林敏之氏に決定いたしました。授賞記念講演では、「ラグビーで子どもを育てる」をテーマにお話しいただきます。皆様どうぞご参加ください。



### 大賞授賞式&授賞記念講演

主催：日本スポーツ学会、NPO法人スポーツネットワークジャパン 協賛：(株)白寿生科学研究所

同時開催 第7回 スポーツ・セカンドキャリア・フォーラム (登壇者 現在調整中)

日時：2019年11月27日 (水) 19:00 ~ (開場18:30)

第一部 スポーツ・セカンドキャリア・フォーラム

第二部 日本スポーツ学会大賞授賞式・授賞記念講演

会場：ハクジュホール

東京都渋谷区富ヶ谷1-37-5 株式会社白寿生科学研究所 本社ビル7F

東京メトロ千代田線・「代々木公園」駅より徒歩5分

参加費：一般1,000円 日本スポーツ学会会員は無料

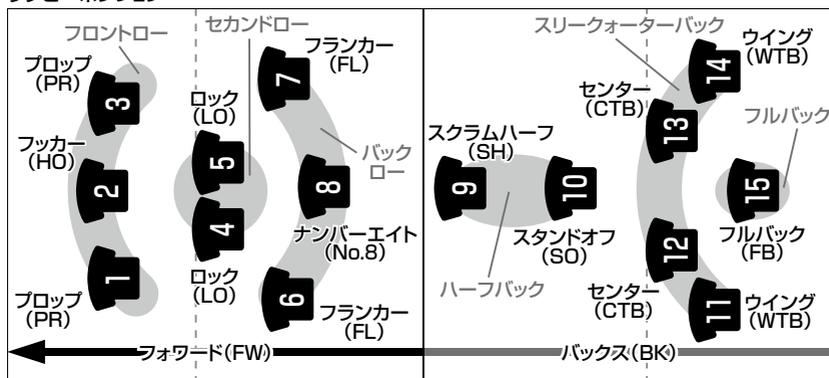
定員：200名 (事前申込は不要です)

問い合わせ：sports.gakkai@gmail.com (日本スポーツ学会)

03-3323-0893 (スポーツネットワークジャパン)

上記連絡先以外へのお問い合わせはご遠慮ください。

### ラグビーポジション



笠原 一也	特定非営利活動法人日本オリンピック・アカデミー名誉会長
金子 潤	中京大学助教
河合 純一	一般社団法人日本パラリンピアンズ協会会長
河本 洋子	青山学院大学名誉教授
菊 幸一	筑波大学教授、日本スポーツ社会学会会長、一般社団法人日本体育学会副会長
木村 元彦	ジャーナリスト
具志堅幸司	日本体育大学学長
小谷実可子	日本オリンピックズ協合理事
重本 沙絵	日本体育大学大学院、リオデジャネイロパラリンピック陸上競技日本代表
高橋 一生	リベラルアーツ21代表幹事、元国際基督教大学教授
田臥 勇太	プロバスケットボール選手 (B.LEAGUE・宇都宮ブレックス所属)
玉木 正之	スポーツ・文化評論家
深代 千之	東京大学教授、一般社団法人日本体育学会会長
細田満和子	星槎大学副学長
堀 莊一	一般財団法人日本スポーツマンクラブ財団常務理事兼事務局長
松浪健四郎	学校法人日本体育大学理事長
森川 貞夫	日本体育大学名誉教授、市民スポーツ & 文化研究所代表
師岡 文男	上智大学名誉教授、スポーツ庁参与、元GAISF国際スポーツ団体総連合理事
山脇 直司	東京大学名誉教授
渡邊 一利	公益財団法人日本財団ボランティアサポートセンター理事長

## 「平和の祭典」のための署名活動にご賛同いただいたモスクワ五輪日本代表選手

(括弧内旧姓・敬称略・2019年8月21日現在)

赤羽綾子／三浦(松本)由子／伊佐(野沢)咲子／穴見利香／竹内(日向)由佳／津田(内田)桂

### 署名の方法

署名の方法は、「オンライン署名」と「用紙記入」の2つから、お選びいただけます。

なお、署名はオンラインか用紙記入のどちらか1回でお願いいたします。

#### 1. 「オンライン署名」の手順 (change.org内のページから署名する)

1) スマートフォンなどのQRコードリーダーでアクセスする

- ①右のQRコード読み取り→②リンク先ホームページの「今すぐ賛同!」をタップ→  
③氏名・メールアドレスを入力し、「賛同!」ボタンをタップ→署名は完了です



2) パソコンのブラウザなどでアクセスする

- ①インターネットにて「日本スポーツ学会」のホームページを検索→  
②「日本スポーツ学会」ホームページ、トップの「オンライン上での署名はこちらから!」をクリック→  
③リンク先ホームページにて氏名・メールアドレスを入力し「賛同!」ボタンをクリック→署名は完了です

※スマートフォンやタブレットからアクセスした場合、2) ②以降の手順は「1) ②→1) ③」と同様です。

※上記 1)、2) の方法ともに、署名は氏名とメールアドレスを入力して「賛同!」を選択した時点で完了しています。その後、「キャンペーン広告」や「会員登録」の案内がでることがありますが、それらは必ずしもお手続きしていただく必要はございません。

#### 2. 署名用紙への記入

署名用紙へのご署名をご希望の方は、日本スポーツ学会HPより署名フォーム (PDF) をダウンロードしていただき、ご住所 (市区町村) まで。個人情報保護の観点から番地は明記しないで結構です)とお名前をご記入の上、下記送付先まで FAX または郵送にてお送りください。恐れ入りますが、通話料・送料等は皆様のご負担にてお願いいたします。また、郵送の際には簡易書留やレターバックなど、追跡可能な方法でお送りいただければ幸いです。

連絡先 日本スポーツ学会 オリンピック・パラリンピック休戦委員会 (JOPTA)

E-mail : jopta2020@gmail.com FAX : 03-6730-1971

署名HP (change.org内) : <http://chnq.it/TyqywwzYG6V>

記名式署名送付先: 〒168-0063 東京都杉並区和泉1-40-13-401 スポーツネットワークジャパン気付  
日本スポーツ学会 オリンピック・パラリンピック休戦委員会 行

# 幻のモスクワ五輪日本代表選手の、 2020年の大会への参加を提案します!!

来年に迫った2020年オリンピック・パラリンピック東京大会へ向かって、選手たちは日夜、熾烈なトレーニングを続けています。子どもの頃から練習時間を確保するために多くのことを犠牲にし、何年もかけて日本のトップに上りつめ、ようやく念願だった五輪出場の切符をつかむ……。もし、その時に突然、日本が「今回の五輪には参加しない」と言い出したら、懸命な努力を続けてきた人たちの選手生命や人生はどうなるのでしょうか。

「そんなの信じられない……」と言う人もいるでしょうが、今から39年前、1980年のモスクワ大会を日本はボイコットしています。「あつてはならないことだ」と思う人もいるでしょうが、事実、日本のトップアスリートはその目に遭いました。

代表となった全18競技178名の人々は、幻のモスクワ五輪代表として、自分の人生をねじ曲げられたまま、その後の時間を過ごして今に至ります。2020年、オリパラ東京大会を成功させるためにも、1980年モスクワ大会の幻の代表の存在を忘れてはなりません。

なぜ、日本は選手たちの人生を踏みにじり、五輪のボイコットを決めたのか？ 表向き理由は1979年12月27日にソ連がアフガニスタンへ軍事侵攻したことへの抗議でした。米国のカーター大統領が日本を含む西側諸国に呼びかけ、67もの国が不参加。続く1984年ロサンゼルス大会は、ソ連がモスクワ大会の報復として東側諸国にボイコットを呼びかけ、16カ国がボイコットするという愚行が繰り返されました。

五輪は平和の祭典です。世界中の人々が一同に集い、4年毎に“また会えたこと”を喜び、互いの生命を感じ合うことが基本です。モスクワ大会の日本代表選手たちは、これまで39年間、一度も集まったことがありません。私たちはそのことに胸を痛み、この悲劇を繰り返すまいと、当時の代表選手や関係者を集めてモスクワ大会を検証するシンポジウムを二度開催してきました。2017年にはモスクワ五輪日本代表選手にアンケートを実施し、五輪への思いやその後の人生を聞くとともに、2020年大会に望むことも調査しました。その中には「自分がやっていた競技の今を見たい」、「聖火ランナーとして大会に参加したい」等の切実な希望が多く見られました。

そこで私たちは、2020年大会を、幻のモスクワ五輪代表が心から祝福してくれるものにしなければならぬと考えました。ですから世界平和への願いを込めて、幻のモスクワ五輪代表を何らかのカチで大会に参加できるよう提案します。できるならば、彼ら彼女らを聖火リレーのランナーや開会式でのセレモニーのメンバーの一員に。

二度と代表選手が幻と呼ばれることがないように……。思いを込めて推薦します。

## この呼びかけにご賛同いただける方は、ぜひ署名をお願いいたします

本署名活動は、2019年7月25日から同年12月20日までの期間で実施し、集めた署名は東京オリンピック・パラリンピック組織委員会と日本オリンピック委員会へ、世界平和を求める市民ひとり一人の声として届けます。

### 呼びかけ人(五十音順・敬称略・2019年8月21日現在)

明石 康	公益財団法人国立京都国際会館理事長、元国際オリンピック休戦財団理事、元国連事務次長
猪谷 千春	国際オリンピック委員会名誉委員、特定非営利活動法人日本オリンピック・アカデミー最高顧問
井上 康生	東海大学准教授、柔道男子日本代表監督
岩崎 恭子	スイミングアドバイザー
大竹 弘和	神奈川大学教授
岡田 匡令	淑徳大学名誉教授、日本スポーツ学会代表理事
奥村 武博	公認会計士、一般社団法人アスリートデュアルキャリア推進機構代表理事
長田 渚左	ノンフィクション作家、特定非営利活動法人スポーツネットワークジャパン理事長
大日方邦子	一般社団法人日本パラリンピアンズ 協会副会長、パラリンピックアルペンスキー金メダリスト

ラグビーに心をこめて

# 釜石にはサイン『13』があった——洞口孝治

大友信彦



日本選手権の同大戦で激走する新日鉄釜石の洞口孝治(1985年1月15日)

大友 信彦(おおとも のぶひこ)1962年宮城県生まれ。気仙沼高—早大第二文学部卒、1985年からスポーツライターとして「Number」などで活動。1987年から「東京中日スポーツ」のラグビー記事も担当。2011年WEBマガジン「RUGBY JAPAN365」設立。著書に『釜石の夢～被災地でワールドカップを～』『オールブラックスが強い理由』(講談社文庫)、編書に『五郎丸歩 不動の魂』(実業之日本社)など。

黙々とスクラムを組み、相手の圧力を受けても一歩も引かず、逆に押し込み、森重隆や松尾雄治らバックスのスタープレーヤーにボールを供給する。

味方がトライを決めれば、手を叩いて喜ぶでもなく、味方同士で抱き合うわけでもなく、淡々と自陣へと走って戻った。

新日鐵釜石ラグビー部。中でも鉄の背骨を持つフオワードの8人の男たち。彼らには、いつしか「北の鉄人」という異名がついた。そして、往々にしてそこには「寡黙な」という枕詞がついた。

その象徴が、背番号「3」洞口孝治だった。

全国のライバルたちを蹴散らした全国社会人大会、そして学生チャンピオンをひねり倒した日本選手権。釜石の真紅のジャージーが頂点に君臨し続けた7シーズン。のあいだ、燃える炎のジャージーの最前列には、いつも洞口が立っていた。

生まれたのは釜石市街から小さな峠をひとつ超えた先の両石地区。釜石工高でラグビーを始め、高卒で新日鐵の釜石製鉄所に就職し、ラグビー部に入部。「最初は、2―3年、辛い練習に耐えれば地元に残れる、と軽い気持ちで入ったんです」という。だが、入部して間もなく、洞口の心に火がついた。

洞口と同期で同じ釜石工高から入社した仲間、ロックの瀬川清がいた。瀬川は身長191センチという巨躯の持ち主。高卒で入社するとすぐ、次代のチームを担うエリートとして期待され、しごかれた。日ごと厳しい練習を課される瀬川は悲鳴をあげていたが、そういう声がかからなかった洞口には、その姿が眩しく見えたという。

「アイツは期待されてるなというのがわかる。何か、面白くないんですよ。だったら、オレもやってやろうと」

期待されていないなら、自分で勝手に強くなろう。先輩たちが無視できなくなるくらい強くなろう。そ

う決意した洞口は、自分でトレーニングに打ち込んだ。スクラム練習では先輩たちから遠慮ない叱責と、時には鉄拳も飛んできた。苦しみながら、洞口は自分のスクラムの形を作っていた。高卒2年目でレギュラーポジションを獲得した瀬川には少し遅れたものの、4年目の1975年度、洞口は右プロップのレギュラーポジションを獲得する。その翌年、1976年春、洞口とは同じ年の松尾雄治が明治大学から釜石へやってきた。同時に、このあと長年一緒にスクラムを組んでいくことになるプロップの石山次郎が秋田の能代工高から、フランカーの高橋博行が秋田高専から、それぞれ加入。V7黄金時代を築く顔が揃った。

背番号10の司令塔に松尾を得たこのシーズン、新日鐵釜石は全国社会人大会決勝でトヨタ自工を27-3と圧倒し、6年ぶり2度目の優勝を果たすと、日本選手権でも早稲田大学に27-12で完勝。初めて「ラグビー日本一」の称号を手にした。前回の優勝

はリコーとの引き分け両者優勝、日本選手権では同じ早稲田大学に16-30で敗れていたから、これが実質的には初の優勝といつてもよかつた。

そこから釜石は栄光の歴史を刻んでゆく。続く1977年度は全国社会人大会準決勝でトヨタ自工に敗れたが、その翌年の1978年度に社会人大会と日本選手権の王座を取り戻す。そして、そこから7シーズン続けて、釜石は日本ラグビーの王座に君臨し続ける。

無敵を誇った釜石。ラン、キックと変幻自在にボールを操った松尾雄治の天才的なゲームコントロールに、「糸の切れた凧」と評されたランニングを見せた森重隆らバックスのランナーたちの華麗なトラインに、ファンは快哉を叫んだ。そして、そんな彼らを支えていたのが洞口らフォワードの8人だった。スクラムでは相手の圧力を受け止めながらも前に出た。ラインアウトは工夫したサインプレーでボールを獲得した。バックスには森や松尾ら大卒のスター

プレーヤーを擁していたが、フォワードは洞口のよう  
うに、東北育ちの、高校時代は中央では無名だった  
高卒選手が並んでいた。だが彼らは粘り強く、痛い  
プレーにひたむきに体を張り続けた。釜石のフォワ  
ードはV7時代に6人を日本代表に送り出した。プ  
ロップの石山は能代工高、洞口とロックの瀬川は釜  
石工高、フッカーの和田透は函館北高、ナンバーエ  
イトの小林一郎は釜石北高、ロック／フランカーの  
千田美智仁は黒沢尻工高。北国から集まった高卒の  
原石たちが、釜石の地で鍛えられ、大卒の選手を並  
べた都会のチームを破り、全国から才能を集めた大  
学のエリート軍団をひねり潰した。その先頭に、い  
つも洞口がいた。

「洞口さんは、スクラムはそんなに強かったわけじ  
やないんです」

そう証言するのは石山次郎だ。石山は新日鐵釜石  
で洞口の4年後輩にあたる。V7の時代は、背番号

「1」をつけた石山と「3」をつけた洞口が「プロ  
ップ」というポジション名の語源通り2本の柱とな  
り、釜石のスクラムを支え、社会人大会&日本選手  
権V7の金字塔を打ち立てた。だが石山は、その相  
棒だった洞口を「強くなかった」というのだ。

「洞口さんは、相手から見たら組みやすそうに見え  
るんです。相手からすると、3番の選手の弱点とさ  
れる右の胸のあたりが無防備なんです。普通の3番  
は、そこに相手の1番に入られたら完全にやられち  
やう。だけど洞口さんは、そこにいられても、逆に  
その力をもらって前へ持つてくることができた」

現代のラグビーでは、スクラムを斜めに押すこと、  
上から押しつぶして落とすこと、自分の首や肩を使  
って相手の首を取り、ねじあげて相手の体勢を崩す  
こと……などはすべて「危険な行為」として反則を  
科される。だが石山によれば「当時は何でもアリで  
した」となる。国際試合ではパンチが飛んでくるこ

とも「日常茶飯事でした」。

だから、現代では許されない反則っぽい押しにも対応しなければならぬ。洞口が優れていたのはその点だった。相手が横から胸元に食いついてきても、下向きに体重をかけて落とそうとしてきても、洞口は相手の力を受け止めながら、スクラムを立て直す。

遮二無二押ししてくる対戦相手の猛プッシュは、圧力を受けても体勢を崩さない洞口の特殊な身体能力と、フッカー和田透の絶妙なコントロールを通じて、逆に相手押し込むパワーへと転化された。洞口とは反対側、左プロップを務めていた石山は、フッカーの和田から細かい要求を受け続けたという。

コントロールをする極意は

「洞口さんが、相手から受けた圧力を、内側（左）にいるフッカーの和田さんに流している。だから左にいる自分も、反対側から和田さんを内側に押ししてスクラムのベクトルをまつすぐ相手陣に向ける」

相手の押す力をもらって相手を押し返す——そんな、

手品のような芸当を可能にしていたのが、後ろ

に着くフォワードの第2列と第3列。今では「バックファイブ」と呼ばれる選手たちだ。左右と後ろからの押しが強ければ、力は相対的に弱いところへ向かう。それが正面に立つ相手のスクラムに向かつて流れ込み、押し込んだ。後ろからのひたむきな押しが、常識を越えた釜石スクラムの強さを支えていた。

「釜石のスクラムは、フロントローだけだと弱いんです。大学生チームにもやられてしまうくらい」と石山は言う。だが8人で組めば、日本で一番強かった。日本代表に選ばれ、全国のトップ選手たちとスクラムを組んだ石山は、釜石のバックファイブほど強い押しをくれる選手たちはどこにもいなかったと言われた。

洞口はV1後の1979年に、石山はV2後の1980年に日本代表入り。日本代表で出場した主要国際試合数を示すキャップ数は石山が19、洞口が24。国際試合が少なかった当時、それぞれのポジション

で最大の数字だった。味方の押しを活かし、相手の力をも利用してスクラムを押し込む彼らの職人芸は、世界の列強と堂々と渡り合った。

もちろん、自力でもスクラムを押しした。

「釜石には『13』というサインがあったんです」

石山が教えてくれた。「13」とは1と3。つまり両プロップの背番号を意味する。

釜石バックスの松尾雄治や森重隆が試合中『13!』と叫ぶ。「13」といったらラグビーでは右センターまたは外側のセンター、森重隆がつけていた背番号だったが、釜石では意味が違っていた。それは「1番と3番、もう1歩前に出ろ!」を意味していた。

その声を聞くと、スクラムからボールを出す瞬間、釜石の両プロップつまり1番と3番はもう一歩グイと前に出た。実際に動くのはほんの数センチ。だがその圧力で、相手ディフェンスは一瞬腰を引く。そ

の瞬間にボールを出すと、味方の攻撃スペースは劇的に広がり、面白いようにトライをとれるのだった。味をしめたバックスの選手たちは、このサインを多用した。

時が流れた。V1時に主将だった森重隆がV5のシーズン、1982年度に選手兼監督を務め、そのシーズンからは洞口が釜石の主将を務めていた。翌年は松尾が選手兼監督になった。V7を花道に松尾が引退した翌1985年、チームは監督を置かず、主将の洞口を中心にチームを運営した。だが、連覇は途切れた。

「松尾の穴は感じなかった。後継者でヤシ（小林日出夫）現姓・角）も育っていたし。ただ、残念なのはチームを支えていた部長やマネージャーに異動があつて、グラウンド以外のところに神経を使わなきゃいけなかったことです」（洞口）

鉄冷え、人員削減……産業構造の変化も黄金時代

の幕引きを促した。松尾に続き、V7の英雄たちがチームを離れ、釜石を離れた。

1987年度を最後に、洞口は現役を退いた。釜石からも離れた。だがラグビーからは離れなかった。

関東社会人リーグのトヨコで監督を務め、日本代表のスクラムコーチも務めた。親会社の倒産、チームの解散など紆余曲折もあつたが、1998年には日本IBMの監督に就任。東日本社会人リーグを指してチームの強化が軌道に乗った矢先だった。1999年6月、急性心不全で死去。45歳という若さでの旅立ちだった。

2011年4月、東日本大震災から1カ月後、東京都内で、新日鐵釜石ラグビー部のOBを中心に、ラグビーを通じて被災地の復興支援を目指す組織「スクラム釜石」が産声をあげた。中心になつて動いた石山は、代表に推され、あいさつで言った。

「私たちの名前がスクラム釜石に決まりました。本当なら『スクラム』で『釜石』だったら代表は当然、洞口さんになるところですが、残念ながらいないので、かわりに石山が務めさせていただきます」

それから8年。石山率いるスクラム釜石は、新日鐵釜石からクラブ化したチーム・釜石シーウェイブスの存続のために奔走し、復興支援のチャリティイベントを重ね、ワールドカップの釜石招致を釜石市に働きかけ、各地で告知、盛りあげイベントを行うなど活動を続けてきた。そして夢は叶った。2019年9月、あの日津波に飲まれ、瓦礫でぐしゃぐしゃになつた釜石の鶴住居地区うすまいに新設されたスタジアムに、世界最高の戦い、ラグビーワールドカップがやってくる。

9月25日。釜石でのワールドカップ初戦。フィジー対ウルグアイ。

空の上から、洞口はきつと見ている。

ラグビーに心をこめて

# いつも戦略は見えていた

——宿澤広朗

永田洋光



日本選手権の決勝で新日鉄金石を破り優勝して  
歓喜する早大の宿澤広朗(1971年1月15日)



関東代表との試合をスタンドから見つめる日本代表の宿澤広朗監督  
(1989年5月5日)

永田 洋光(ながた・ひろみつ) 1957年東京生まれ。出版社勤務を経てフリーのスポーツライターとなり、1988-89年度からラグビーの取材を始める。最初に取材したシーズンに神戸製鋼が初優勝。宿澤ジャパンのスコットランド戦勝利も秩父宮で目撃した。以後もラグビーの取材を続けて現在に至る。著書に『勝つことのみが善である 宿澤広朗全戦全勝の哲学』(文春文庫)、『新・ラグビーの逆襲』(言視舎)などがある。

第1回大会が1987年に開かれたラグビー・ワールドカップは、その57年前(30年)に第1回大会が開かれたサッカーFIFAワールドカップに比べれば、当初は後発でマイナーな大会だった。

それでも日本のKDD(現KDDI)がメインスポンサーとなつて財政面を支援。共同開催国のニュージーランドが、地元で優勝を果たしたこともあり、一躍大きな可能性を秘めたスポーツ・イベントとして注目を集めるようになった。

4年後の91年には、ラグビーの母国イングランドを中心に、スコットランド、ウェールズ、南北アイルランド、フランスにまたがって第2回大会が開催され、プロフェッショナルリズムに堅く門戸を閉ざしていたラグビーの商業的なポテンシャルが、世界的に認知された。95年には、発足したばかりのネルソン・マンデラ政権下の南アフリカ共和国で第3回大会が開催され、大会終了後にラグビーはプロフェッショナル・スポーツへと大きく舵を切る。

わずか8年でラグビーを取り巻く環境は激変する。そんな世界の潮流を読み切れず、従来のアマチュアリズムを頑なに守る方針を貫いた日本ラグビー界のなかで、ワールドカップのインパクトを深く理解し、将来を見据えていた男がひとりいた。

第2回大会で監督として日本代表を率い、ジンバブエを52―8と破つて、日本にこの大会初めての勝利をもたらした宿澤広朗だった。

宿澤は、89年2月に38歳の若さで日本代表監督に就任。3か月後の5月28日には秩父宮ラグビー場で来日したスコットランドを28―24と破り、日本にラグビー伝説国からの初勝利をもたらした。

バブル景気で盛り上がった時代には、宿澤は今で言うところの「二刀流」だった。

大谷翔平がまだ生まれてもいない30年前のメデイアは「二足のわらじ」と表現したが、38歳の日本代表監督は、当時の住友銀行資金為替部に勤務する敏

腕デイナーでもあった。85年の「プラザ合意」以降急激に進む円高を背景に、銀行の資金を為替で運用するデイナーは当時の花形職業であり、そんな「エリート」が日本代表を指揮して伝統国を破ったのだから、世間は快挙に酔った。

しかし、金星は周到な準備のたまものだった。

宿澤は、対戦相手の映像分析という手法が知られていなかった時代に、テレビ放送された映像からスコットランドがトライを奪われるシーンを選びすぐって選手たちに見せた。機械オンチと子どもたちに揶揄された男が、リモコンの早送りと巻き戻しを繰り返して押しながら、弱点を刷り込んだのだ。

その上でふたつのキーワードを簡潔に示した。

密集の近くを力任せに突進してくる巨漢選手たちをタックルで倒し続けること。

攻撃に転じれば、素早いパスで密集から遠くにボールを運ぶこと。

当初は「スコットランドに勝つ」と言われても半

信半疑だった選手たちが、がぜんその気になった。

キャプテンの平尾誠二も、試合のさなかに「ホンマ、ミーティングの通りや」と舌を巻いた。

プラン通りの完勝だった。

金星は日本代表のハードルをさらに高くした。

翌90年4月には第2回ワールドカップに向けたアジア・太平洋地区予選が東京で行なわれる。ライバルの韓国、初めての対戦となるトンガ、西サモア（当時1996年にサモアと改称。以下サモアと表記）の3カ国から2勝以上を挙げなければ、世界の晴れ舞台に立てないことになる。金星は、あくまでもワールドカップ予選に至るプレリウドだった。

結果的に日本は予選を2勝1敗で2位通過。翌年の本大会でジンバブエから初勝利をもぎ取ったが、勝利という結果以上に、そこに至るプロセスに宿澤の勝負師としての優れた資質が集約されていた。

スコットランド戦直後に、日本代表に準じる選抜

チームを編成。トンガ、サモアへ史上初めての遠征に踏み切った。日本ラグビーの手の内をさらすリスクは覚悟の上。それ以上に初対戦となる南太平洋諸国のラグビーを詳細に見ることが目的だった。

収穫は大きかった。

トンガもサモアも、巨体を活かした激しいラグビーを得意とすることを学び、それに対して日本の緻密なパスプレーが通用する手応えもつかんだ。

試合を終えると、現地のラグビー関係者と盃を交わし、どちらの国がよりワールドカップ出場に強い意欲を持っているかを探った。そして、参加16チームがすべて招待された第1回大会に招待されなかったサモアが、本大会出場に並々ならぬ意欲を燃やしていることを知る。この時点で、勝利をもぎ取るターゲットが初戦の相手トンガに定まった。

予選直前にトンガが来日すると、宿澤は練習を密かに偵察。動きが鈍いことをつかんで勝利への確信を深め、目論み通り快勝すると、勢いに乗って韓国

を撃破。最終戦を待たずに本大会出場を決めた。

最終戦でサモアに敗れて2位通過が決まると、本大会で対戦するアフリカ地区代表決定戦を、ジンバブエの首都ハラレに飛んで偵察。ホテルに泊まったのは一夜だけ。あとは機中3泊という、一泊四日の「弾丸ツアー」だった。

本大会を控えた91年にも、宿澤は日本代表に準じるジャパンBを編成してジンバブエに遠征。対戦相手を詳細に分析した。52―8という大勝は、二度のツアーが象徴するように、緻密な分析と周到な準備、個別・具体的に練り上げた戦略のたまものだった。

ワールドカップを終えると、宿澤は銀行員としての「本業」に復帰。当時の住友銀行大塚駅前支店の支店長を皮切りに出世の階段を上がっていく。

94年には1シーズンだけ母校・早稲田大学ラグビー部の監督を務めたが、むしろ本業での活躍で高く評価されるようになる。

市場営業部長として本店に戻っていた2001年9月11日には、ニューヨークで起きた同時多発テロの対応を陣頭指揮。翌日の取引をまかなえるだけの外貨を調達するかたわら、世界主要国の対応策を先読みしながら、各国の為替相場が定まらない未曾有のピンチをビジネスチャンスに変えた。危機管理と攻めの資金運用を、刻々と変わる状況を読みながら一気にやっつてのけたのである。

こうして本業の評価が高まる一方で、前年の00年12月からは再びラグビーの世界にも足を踏み入れた。今度は現場に立つのではなく、監督を務める向井昭吾をサポートする日本代表強化委員長として。そして、自ら提案した日本代表選手の「オープン化」を円滑に進めるために――。

96年に南半球のニュージーランド、オーストラリア、南アフリカの3カ国にまたがる「スーパー12」が発足。これが現在のスーパーラグビーの原型だが、プロフェッショナル・スポーツとなったラグビーは

レベルを格段に上げた。一方の日本は、宿澤が監督時代にジンバブエから挙げた1勝が依然としてワールドカップでの唯一の白星だった。しかも、00年秋のヨーロッパ遠征の際には、国内シーズン真っ只中であつた社会人選手の辞退が続き、ベストメンバーを組むことができなかつた。

93年にスタートしたサッカーJリーグの影響もあつてラグビーの存在感は薄れつつあつた。

危機感を募らせた宿澤は、日本代表に選ばれた社会人選手を代表活動期間に限って所属企業から日本ラグビー協会に「出向」させ、日本協会が報酬を支払うというアイデアを思いつく。

これが「オープン化」だ。

こうしてテストマッチにベストの選手たちを集め、ワールドカップで結果を残そうとしたのだ。

さらに、それまで関東・関西・九州の三地域に分かれて戦っていた社会人チームをひとつのリーグに集めるトップリーグの実現にも奔走した。

そう、現在行なわれているジャパングビーリーグと日本代表強化のフォーマットを作ったのが、宿澤だったのである。

このとき、日本協会内部の時期尚早論を強引に押し切って「改革」を断行した意図を、宿澤は著書『日本ラグビー復興計画』でこう説明している。

「日本ラグビーは『失われた10年』をキャッチアップすべく、トップダウンによるラグビーの復権を目指している」

「失われた10年」という言葉を使わざるを得なかったほど、危機感を募らせていたのだ。

オープン化は、02年の段階で大学生を除く代表選手全員が出向契約を結び、一定の成果を出した。

トップリーグも、「準備に時間をかけることで得るものと失うものを天秤かけると失うものが多い」という理由で、慎重論を退けて03年9月に開幕した。開幕がオーストラリアで開催されるワールドカップ直前だったため、選手からはタイミン

グが悪いという声も聞かれたが、その点を突っ込むと、宿澤は「だから02年に開幕したかったんだ」と無然とした表情で答えた。素早い決断と果敢な実行力を旨とする宿澤にすれば、月に一度の理事会でさまざまな案件の意志決定が為される日本協会の構造がまどろっこしく思えたのだろう。

強化委員長を退いた04年には、オープン化で路線を敷いたにもかかわらず、日本代表がベストとはほど遠いメンバーでヨーロッパ遠征に臨み、前年のワールドカップで11―32と食い下がったスコットランドに100点ゲームで大敗した。

将来を見据えて強引に推し進めたオープン化を骨抜きにされた宿澤は、遠征後に開かれた日本協会の理事会で激怒。監督解任と、外国人監督招聘を強硬に主張した。念頭にあったのは03年ワールドカップで母国オーストラリアを準優勝に導いたエディー・ジョーンズの招聘だった。

宿澤は、96年に日本代表コーチを務めたエディー

と親交があり、彼の手腕を高く評価していた。

ふたりは当時、オーストラリアに本拠を置くスーパーラグビーの2チームと、トップリーグのオールスター、日本代表に準じる選抜チームの計4チームが毎年2月に戦う「スーパー4」という大会の開催も画策した。サンウルブズによるスーパーラグビー参戦の12年前に、宿澤とエディーは日本ラグビーの強化を見据えて秘策を練っていたのである。

このプランは、日本選手権の日程と、オーストラリア側からまだ冬の日本で試合を行なうリスクがネックとして指摘され、残念ながら頓挫したが、このときを振り返って、エディーは「シユクザワさんはシャープな人だった」と高く評価する。毒舌と人をほめないことで有名なあのエディーが、である。

しかし、このときはエディーの日本代表監督就任が見送られ、宿澤は、当時三井住友銀行大阪本店営業本部長となつて大阪に単身赴任していたこともあり、04年度限りで97年度から連続して務めてきた日

本協会理事を退くことになった。

一部では「ラグビー協会が宿澤を切った」と見る向きもあつたが、本人を知る人たちの多くは、意志決定の遅いラグビー界に業を煮やした宿澤が、ラグビーを見限つて銀行での仕事に本腰を入れた――と、今でも考えている。

06年に宿澤は、三井住友銀行に新設されたコーポレート・アドバイザー本部本部長に、取締役専務執行役員として就任。東京に戻った。

ラグビーよりも一足早く、銀行という組織の頂点を目指すチャンスが巡ってきたのだ。

そんなさなかの6月17日。

多忙な日々を縫つて宿澤は、登山に出かけた。

登山は、大阪に単身赴任中に、宿澤が始めた新しい趣味だった。ハイキングに誘われた宿澤が、初心者向けのコースでバテて、そこから持ち前の負けず嫌いでのめり込んだ。このときも、群馬県の赤城山という難度の低い登山だった。

しかし——。それにもかかわらず、宿澤は山頂で心不全に見舞われ、そのまま還らぬ人となった。誰もが予想だにしなかった突然の死だった。

享年55。

濃密な、けれどもあまりにも短い一生だった。

それから13年の月日が経ち、この9月20日から日本でワールドカップが開催される。

28年前に北アイルランドのベルファストでジンバブエから奪ったワールドカップ初勝利も、今や遠い昔話となりつつある。

しかし——宿澤の影がワールドカップの舞台から消えるわけではない。

幼い頃からラグビーに惹かれ、長じてこの競技を通して父親を深く理解するようになった長男の孝太が、マッチドクターとして今回のワールドカップに臨むことになったのである。

宿澤は、理系男子の長男が過度にラグビーにのめ

り込まないよう注意深く接していたが、孝太は中学・高校とラグビーに親しみ、慈恵医大に進学した後もプレーを続け、今ではトップリーグの試合を中心に、マッチドクターを務めている。その実績が評価されての「ワールドカップ出場」だ。

日本人ドクターである以上、日本戦を担当することはできないが、おそらく伝統国や強豪国の試合に登場し、ときには脳しんとうの診断を巡って世界のチームと英語で厳しいやりとりをすることになるだろう。チェックで正式に脳しんとうと診断されると次の試合にその選手が出場できなくなるため、ドクターとチームスタッフの間では、必ずといっていいほど激しく厳しい議論が交わされるからだ。

「でも、国内の試合と同じように選手の安全を第一に考えて、厳正に診断を下そうと思っています」

孝太はワールドカップに臨む覚悟を、そう話す。父が踏んだ舞台に今度は裏方として長男が立つ。これもまた、宿澤が残したレガシーなのである。

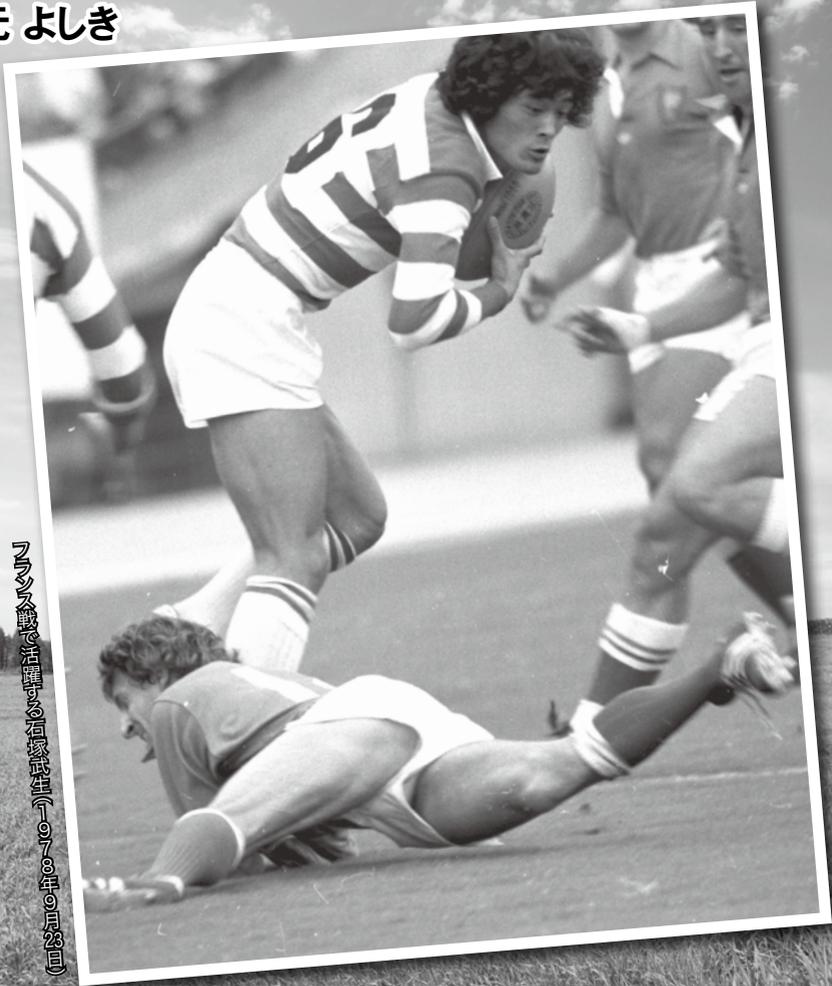
ラグビーに心をこめて



# タックルを信じ続けた

——石塚武生

大元 よしき



ラグビーの歴史を語る作家大元よしき



**大元 よしき** (たいげん・よしき) 1962年東京生まれ。保善高校でラグビーに出会い東洋大、東急、ミノルタでラグビー部に在籍。その後、外資系IT企業に転職し41歳でライターに転身。著書に『1万回の体当たりータックルマン石塚武生 炎のメッセージ』『あの負けがあつてこそー再起を懸けたアスリート25の軌跡』『強い組織をつくる上田昭夫のプライド』(以上ウエッジ)等あり。

「タックルマンも元日本代表のキャプテンも昔のこ  
となんだ。すべては『元』で語られる。僕は過去に  
生きているんじゃない。今を生きているんだ。その  
今の僕を書き残してほしい」

2008年、真夏の菅平。石塚武生と私の関係は  
この一言から密度の濃いものへと変わった。それは  
石塚が突然死症候群でロスタイムなき人生のノーサ  
イドを迎える1年前のことである。

だが、その年の秋には「僕の身体は2年くらいし  
かもたないかもしれない。だから生きた証を残して  
おきたい」という切実なる言葉に変わっていた。

石塚武生。1952年静岡県下田市に生まれ、國  
學院久我山高校でラグビーに出合い早稲田大学では  
キャプテンを務め大学選手権に優勝。170センチ  
という小柄な体格ながら、大学3年で全日本学生代  
表、4年時には日本代表に選出され、後に日本代表  
のキャプテンにも指名された。

石塚の最大の魅力はタックルにある。粘り強く、

低く鋭いタックルを武器に日本を代表するフランカ  
ーとして誰もが認める存在となった。ファンは親し  
みを込めて「タックルマン」と呼んだ。

そんな石塚に忘れ得ぬ一戦がある。

1975年、当時世界最強と謳われ「レッドドラ  
ゴン」の異名を持つウェールズを国立競技場に迎え  
たときのことである。世界を席卷したスター選手揃  
いのウェールズの前に日本代表は成すすべもなく失  
点を重ねていった。

しかし、一発のタックルに5万を超す大観衆が沸  
き返った。タッチライン際を快走しトライをねらう  
JJウィリアムスを石塚は職人技のタックルで仕留  
めたのだ。世界最高のウイングと呼ばれた男に日本  
のタックルマンが意地を見せた瞬間だった。

結果は「日本代表6―82ウェールズ」の大敗だっ  
たが、その後、前代未聞の珍事が起こった。なんと  
何百人というファンが観客席からグラウンドに押し  
寄せ石塚を胴上げしたのだ。それは80分間敢然と闘

い続けた石塚への敬意の表れだった。

しかし、絶頂期の石塚に時代の波が襲い掛かった。日本代表フォワードの大型化構想である。国代表同士のテストマッチで黒星続きの日本代表を根本から見直す方針により、「身体が小さい」という理由で日本代表から外されたのだ。

「俺が誰に負けたって言うんだ。ふざけるな！」

普段は口喧嘩さえもしたことがない温厚な男が平常心を失って激怒した。

この心の乱れが選手生命を脅かす致命的な怪我を招いた。慶應義塾大学との練習試合で、力を誇示するような強引なプレーで脛を骨折したのだ。

それから丸2年。3度の手術と長いリハビリ生活を経てグラウンドに復帰した。その間は試合も見ず、極力ラグビーの情報を遮断し、ただひとり黙々とトレーニングを積んで自らと向き合った。

「傲慢でチームプレーに徹することができなかつた自分の甘さです。あれは勝負の神様が僕に気づかせ

るために怪我をさせたのだと思っています」

長いトンネルを抜け出し、生来の謙虚さを取り戻した石塚はフランス代表戦で復帰を果たした。

そして翌1979年に生涯最大のベストゲームを経験する。ラグビーの母国イングランドを花園ラグビー場に迎え「19―21」の大接戦を演じたのである。この日も「タックルマン」は、遥かに体格で勝る相手に、粘り強く、低く激しいプレーで日本代表のプライドを見せた。その痛みを厭わない献身的な姿は、まさに日本を代表するプレーヤーとしてファンの記憶に深く刻み込まれた。

その一方引退後は、伊勢丹や早稲田大学で監督を務めたが選手やコーチとの軋轢、結果へのプレッシャー、チームを取り巻く人間関係に苦悩し精彩を欠いていった。そして、全国大学選手権の2回戦敗退を理由に早稲田大学の監督を辞任。

元日本代表キャプテンという誇りも自信もすべて失いラグビーから背を向けるようにしてグラウンド

から離れていった。

しかし、「汚点を残したまま離れるわけにはいかない」と英国でのラグビー留学を決意。帰国後はプロコーチとしていかにラグビーの楽しさを伝えるかに心を砕いた。そうしたなか日本ラグビー協会から「普及育成のため」の職員にと招聘された。

そこで出会ったのがコンタクトプレーのない「タグラグビー」だった。お互いに腰にリボンをつけて取り合うという、年齢や性別に関係なく誰もが楽しめるという点にすっかり魅せられた。

それからの石塚は要請があれば喜んで全国各地の小学校に赴き、また、「はじめてのラグビーボール」などのスポーツイベントにも取り組んだ。

「みんなで頑張ることの楽しさやスポーツの楽しさを心に刻んでくれたら嬉しいです。スポーツは本来楽しむものですから」

子ども好きの石塚にとっては、まさに天職とも言える役割だった。全校生徒が10数人という地方の学

校もあれば、丸一日をかけて全校生徒数百人に指導をしたこともある。

特筆すべきは、どんなに人数が多くても指導した全ての子どもたちと先生方から体当たりを受けたことだ。この触れ合いによつて石塚と子どもたちの心の距離が一気に縮まり、その後は抱きつかれ、もみくちゃにされ、満面の笑みを浮かべて喜んでいる姿を私は何度か見ている。これが「タックルマン」と呼ばれた男の素顔なのだ。

指導を終えた石塚は参加した人数をノートに付けてカウントしていった。いつしかそこに「一万回の体当たり」という目標ができた。

後年、茨城県の常総学院高校ラグビー部の監督に就任した後も時間の許す限りタグラグビーの指導に赴いた。その中には、茨城県内にある少年院・水府学院の「生涯学習移動講座（矯正施設編）」のタグラグビーも含まれていた。

この水府学院の4回目の指導の際に「スタッフと

して手を貸してほしい」と相談を受けたことから、石塚と私の関係がさらに深まり、本稿冒頭の「生きた証を」という話に繋がっていく。

2009年5月。私は石塚の活動を取材するライターとして水府学院に同行した。

在院生は幼い頃に虐待やネグレクトを受け、校内でもいじめを受けていたケースが多いと聞いている。だからといって犯罪が正当化されるわけではないが、背景を知らなければ彼らと向き合うことができない。そう言っ  
て指導の前に院長や担当教官から少年犯罪の現状を熱心に聞き取った。

石塚は在院生を前に30



明大との大学選手権決勝をスタンドから見つける早大の石塚武生監督  
(1997年1月15日)

分の講話を行い、選手時代の実績や栄光よりも傲慢さゆえの大怪我、長いリハビリからの代表復帰、指導者としての後悔や挫折、孤独感<sup>えぐ</sup>をありのままにさらけ出した。それは傷口を抉るような辛い記憶だったに違いない。時折声を詰まらせていると、その思

いが通じたように何人かの少年たちが肩を震わせ涙を拭っていた。

石塚が伝えたかったことは、そのマイナスともいえる経験の中にこそ成長させてくれる要因がある。人はどのような挫折や失敗であっても、人生好転の機会にすることができる。だから、絶対に自分を粗末にはしていない。人の喜びを自分の喜びとしよう。人生は逃げることなく真つすぐぶつかって行くことによって拓かれていくというものだ。

毎日接している常総学院の生徒と同年代の少年たちだから、水府学院の指導にはことのほか思い入れが強かったようだ。

講話が終わり、実技の指導に入ると年齢相応の笑顔がグラウンドいっぱいに広がり、中学や高校の体育の授業と何ら変わらない光景に変わっていった。

そして最後に80名を超す少年たちから体当たりを受けた。「手を抜かないで!」「よし来い!もつと来い!」と励まし全員を受け止めた。

その日の帰り道、車を運転する石塚が激しい動悸に襲われ胸を押さえて震えだした。額には汗が浮き出していた。プロテクターも着けず少年たちから体当たりを受け、身体が悲鳴をあげていたのだ。

「体当たりだけはやめてほしい」と私が告げると、「彼らには本気で受け止めてあげる大人が必要なんだ」と強い意志を表した。無理は承知だったのだ。

2009年8月6日。石塚は突然死症候群によって天に召された。

生前、石塚は出院後の彼らの社会復帰を願い、少年院と社会を繋ぐ活動に広げていきたいと考えていた。その遺志を受け継いだ者たちによって、没後5年半を経た2014年に「水府学院『絆』プロジェクト・タグラグビー交流マッチ」が実現した。

これは企業の経営者やラグビー関係者約50人が、スポーツを通して在院生と直接交流を図る、全国でも水府学院だけの特異な取り組みとして現在も続いている。石塚武生の魂は、今もここに。

こちらのページは  
WEB版ではご覧いただけません。

ラグビーに心をこめて

# ボールの奪い合い、 それは自由の奪い合い

——平尾誠二

玉木 正之



トップリーグのNEC戦をスタンドから見つめる  
神戸製鋼の平尾誠二総監督(2007年10月23日)



大学選手権の決勝の慶大戦で激走する同大の平尾誠二  
(1985年11月6日)

**玉木 正之**(たまき まさゆき)1952年京都市生まれ。東京大学教養学部在学中より東京新聞紙上で執筆活動を開始。日本で最初のスポーツライターを名乗る。著書に「スポーツとは何か」(講談社現代新書)など多数。訳書にR・ホワイティング「ふたつのオリンピック」(KADOKAWA)、「和をもって日本となす」(角川文庫)など。

平尾誠二と初めて出逢った日のことは、今もはっきりと憶えている。それは、素晴らしい瞬間だった。

1988（昭和63）年11月。彼が神戸製鋼に入社して3年目、25歳の秋。同志社大学の先輩で日本最高のロック（フォワード）と言われた林敏之からキヤプテンの座を引き継いだ直後のことだった。

そのとき私は、さんざん考えた末に、彼に対する最初の質問を心に決めていた。

——ラグビーというスポーツで重要なのは、個人プレイですか？ チームプレイですか？

いま考えれば少々レベルの低い質問とも思うが、当時36歳でスポーツライターとして活動を始めて約15年。ようやく「スポーツとは何か？」という大命題の存在に気づき始めたばかりの若輩者は、様々なスポーツマンへの取材を通して、スポーツに関する素朴な、しかし根源的な疑問に対する回答を欲しがっていた。そこで伏見工高で高校日本一、同志社大学で大学選手権3連覇という最高の実績を持つラガ

ーマンに対して、最も基本的と思える質問をぶつけることにしたのだ。

——ラグビーで重要なのは、個人プレイか？ チームプレイか？

それは、たとえば早大や明大出身のラグビー界の重鎮にぶつければ、「バカモン！」と一喝されるような質問だった。そして「チームプレイに決まってるじゃないか」と言われたあと「One for all. All for one」という意味を知つとるかね……魂のラグビーとは……真の犠牲的精神で……死ぬ気で闘う……」といった演説を開陳されることになるのがオチだった（それは実際に私が体験したことだった）。しかし平尾の答えは違っていた。しかも彼の答えは、私の予想をはるかに超えるものだった。まず個人のプレイが基本にあつて……といった言葉を、彼は返してこなかった。私が質問の言葉を発すると、ソファに座っていた彼は「うくん……」と唸りながらまず天井を見上げ、次にまた「うくん……」と唸

りながら顔を伏せ、そのままの姿勢で、「わかりません」と答え、次のように続けたのだった。

「チームプレイが重要やという人が多いのはわかっています。けど、ある程度の個人プレイのスキルも身に付けていないとチームプレイはできません。どういうたらエエのか……それが、いまの僕のテーマですわねん」

個人プレイが先か、チームプレイが先か……それは、その年のシーズンに神戸製鋼が初めて日本一になつて以来、7連覇という偉業を果たす間を通して、ずっと私と平尾のインタヴューのテーマとなり続けた。それはまた、ある意味でラグビーというスポーツの日本における既成概念との闘いでもあつた。

フィールドに出るときは死ぬ気で闘いに臨む……というのが「常識」と言われていた時代に、平尾は真つ向からそれを否定した。

「何もかも擲<sup>なげ</sup>つてラグビーに打ち込めば、今より少しは強くなるかもしれません。でも、仕事も家庭も

ある社会人にとっては、失うものも多いはず。日常生活もきちんとしたうえでラグビーを楽しむ。恋愛もし、デートもし、結婚もし、子供も育て、仕事もし、映画も見、本も読み、それでもラグビーをしたいという気持ちになつた連中が集まって、初めて本当に強いチームができるはずですよ」

「スポーツは、より楽しく生きるための手段です。ラグビーを死ぬ気でやれ、なんて言われたら、僕は今すぐラグビーをやめます」

「僕はラグビーを楽しみたい。それは試合に勝つことを軽視するのではない。勝つ前にラグビーをきちんとプレイせんとアカンのに、勝とうとする意識が強くなると、逆にプレイが疎かになり、無駄な力が入つたりする。それよりもスポーツを楽しむという姿勢のほうが、ラグビーというゲームの本質も理解できるし、その結果、勝利にもつながるはずですよ」

個人プレイか、チームプレイか……というテーマ以外は、日本のラグビーの(当時の)常識に対して、

気負うところなく理路整然と話す平尾の言葉を聞いて、私は、彼がキャプテンとして率いるチームに是非とも勝ってほしい、優勝してほしいと思った。そしてこのインタヴューのあと私は、あらかじめ用意していた『私も負けるかスター軍団』というタイトルを、『翔べ！ 理想の楯円球よ、勝敗の彼方まで！』と変更して取材レポートを発表したのだったが、そのレポートは、まったく評価されなかった。それは、ある意味で当然のことだった。どんな素晴らしい理念も、この国のスポーツ界では「勝てば官軍」であり、負ければただの「負け犬の遠吠え」なのだ。

《大西 ぼくは自主性ということをね、あんまりいい過ぎたと思うんだ。(略) 神戸製鋼へ行った連中なんか、ひとつもうまくなっていない。／北島 チームプレイを考えずに、一人に頼りすぎているよね。／大西 上手なやつはすぐ一軍だ。たとえば平尾(誠二)なんか入ったらすぐ使うでしょ》(1988

年12月『毎日グラフ増刊ザ・ラグビー』元早大監督・大西鐵之祐、明大監督・北島忠治対談より)

私の書いたレポートとまったく同じ時期に出たこの対談が、当時のラグビー界の圧倒的多数派の意見だった。それだけに、平尾の「新しいラグビー論」も、一度や二度の優勝や日本一程度では、ラグビー界の権威や「ラグビー・ジャーナリズム」に受け入れられなかった。

平尾の率いる神戸製鋼の優勝を、スポーツ紙は「フォワード・バックス一体となった15人ラグビー」「個人を犠牲にした見事なチームプレイの勝利」……などと書き立てた。平尾は、「フォワードもバックスもラグビーやってるんやから15人でやるのは当たり前のことですがな」「トライを取りにいった最善のプレイやから、誰も個人を犠牲になんかしてまへんがな」と苦笑いした。

しかし、苦笑いでは済まないこともあった。それはレフェリーのジャッジだった。日本選手権で早稲

田大学を58対4という大差で破りV2を果たした翌年、明治大学を相手にした日本選手権では、誰が見ても明らかに明治大学に有利と言うほかない笛が吹かれた。その試合後、平尾は苦虫を噛み潰すどころではない不満な表情を浮かべ、その頃恒例となっていた日本選手権のあとの深夜のホテルのバーでの飲み会の席でも、同じ表情で押し黙ったまま、早々に引きあげていった。

もつとも、この「レフェリー問題」は、思わぬカタチでカタが付いた。翌年も同じ明治大学との再戦となった日本選手権の試合前、国立競技場のスタンド下の通路で、平尾にその日の試合について話を聞いていたとき、彼が突然、「あつ。ちよつと……」と言って私の前を離れ、廊下を歩いてきた男に近づき、その男の腕を取って目の前にあったトイレに連れ込んだのだ。その男性は、前年に続いてその日の試合でもホイッスルを吹くことになっていたレフェリーの某氏だったのだ。

しばらくしてトイレから出てきた平尾は、無言でフィールドへ出て最後のウォーミングアップを開始し、某氏は審判控え室に消えた。

そしてその日の試合後、神戸製鋼が34対12で明治大学を倒したあと、面白い光景があった。それは平尾がレフェリーの某氏と握手しながら、左手で某氏の肩をポンポンと2、3度叩いたことだった。まるで、いやあ、ご苦労さん、ナイス・ジャッジでした、とても言わんばかりに……。

その夜、ウイスキーを傾けながらその話をする、平尾は、「細かいところまで、見たはりまんなあ」と笑ったあと、トイレでの出来事を話してくれた。「ややこしい話はしてません。簡単なことです。去年みたいな笛やったら、途中で試合をやめまっせと言うただけです。脅しやないですよ。当たり前のことモなことを言うただけですわあ……」

レフェリーの問題に続いて、平尾を悩ませたのはラフプレイの問題だった。大八木敦史、林敏之、武

藤規夫、それにV4のシーズンから平尾の後を継いでキャプテンとなった大西一平など、神戸製鋼のフオワード陣の強烈なタックルやモールは、以前からラフプレイと非難されることが多かった。そのうえV4の年から新たに加わったイギリス人サイモン・ウエンズレーのプレイは、彼らのプレイに輪をかけて激しいものだった。が、それらの非難に対して平尾は理路整然と反論した。

「ラグビーはボールの奪い合い。それは自由の奪い合い。ボールを奪ったら自由になる。それがわかっているからウチの選手は必死にボールを奪う。ましてやサイモンはラグビーの本場で生まれ育った選手です。オフサイド・ポジジョンで倒れてる選手は、蹴つてもイイし踏みつけてもイイと考へてる。それをラフプレイと非難するなら、日本のラグビーはいつまでも世界に追いつけませんよ」

平尾は言葉を大切にする人物だから意味のない言葉は使わなかった。

「精神論は大事ですね。でも、気合いを入れると言われて気合いが入るわけやない。根性を出せと言われて根性が出るわけでもない。そこには理由が必要です。だから神戸製鋼ステイラーズの根性は科学的根性ですね」

そんなサイエンティフィック（科学的で合理的で頭脳明晰な）スポーツマンと過ごせた日々は、スポーツライターとして最高に幸せなときだった。

最も痛快だった想い出は、V7のあと私が『平尾誠二八年の闘い』（ネスコ）という本を上梓したときのこと。本の出版を許可した覚えはない、とラグビー協会幹部が言いだしたので出版社の女性編集者が挨拶に訪れたところ、「こんなくだらん本は出すなあ！」と協会の某幹部に怒鳴られ、本を身体に投げつけられ、泣きながら帰ってきた。そして「本を出せなくなりました」とすすり泣きながら言ったことを平尾に伝えると、彼は「そんな無視したらいいですよ」と言ってくれたので本は店頭に並んだの

だが、その数日後、ラグビー日本代表の練習が行われたとき、当時ラグビー協会の名誉総裁だったヒゲの殿下（故寛仁親王殿下）が現れ、「いい本だから読みなさい」と、日本代表のラグーマンたちに一冊ずつ配ってくださったのだった。そして「君は素晴らしい男だねえ」と声をかけてくださった、と平尾が知らせてくれたときは、電話を通して二人で快哉を叫んだものだった。

残念だったのは、V7の直前。何かと軋轢のあった日本ラグビー協会に対して一石を投じるため、当時創設3年目を迎えて大成功を博していたJリーグの川淵三郎チェアマン（当時）に会いたい、と平尾が言い出したときのことだった。私は即座に、これを雑誌の対談企画にすることにした。当時のラグビー協会はプロとの交流を忌み嫌い、この対談が発表されると協会から平尾に何らかの処分が下されることも考えられた。が、それも織り込み済みで、神戸製鋼亀高素吉社長の許可も得た平尾の希望に応え、

川淵氏の了解を取り、3月発売の文藝春秋誌で……と準備万端整えたのだが、阪神淡路大震災の勃発で、企画を実行に移すことができなくなってしまった。もしもその対談が実現していれば、ラグビー界の改革も、もう少し早く……とも思われるのだが……。

その後日本代表監督となった平尾を取材するため、サッカー日本代表の岡田武史監督とシンガポールでのアジア予選へ出向き、3人でスポーツ論をぶつけ合ったことや、彼の主催するSCIX (Sports Community & Intelligence Complex) に毎年招かれ、スポーツ論を講義させてもらったこと、そして今年の3月、「これを最後に、病気の療養に専念しますわ」と言いながら、JリーグのV・ファアール長崎が主催するシンポジウムにスピードスケートの岡崎朋美さんやバドミントンの小椋久美子さんと共に参加してくれたこと……などなど想い出は尽きない。が、紙面が尽きた。

最後に冒頭の疑問——ラグビーは個人プレイか？

チームプレイか？ ……という命題に対して2人で出した回答を書いておこう。

15年くらい前のことだったか、神戸南京町にある平尾の行きつけのバーで、二人でシングルモルトのロックを傾けたとき、彼が突然、「チームプレイを日本語に翻訳すると、どういう言葉になりますか？」と言いだした。

私は即座に団体競技という言葉が頭に浮かんだ。その瞬間、すべての疑問は氷解した。チームプレイは団体競技ではない。チームプレイは、一人一人の個人が同時に異なる動きをすることでチームとして機能する。が、団体競技は一人一人が個人として相手と闘い（テニスや卓球の団体戦）、あるいは演技を見せて（体操の団体戦）、その合計で勝敗を競う。チームプレイと団体競技は、まったく異なる概念なのだ。

が、日本で最も人気のあるスポーツである野球が、個人個人の勝負（投打の対決）が中心の団体競技で

あるにもかかわらず、チームプレイの要素（守備のカットプレイや攻撃のヒットエンドラン等）も存在するため、日本人の多くはチームプレイと団体競技をはっきりと分別して認識できていない。だから合宿時の朝の散歩や、声を揃えて列を作つてのランニングといった団体行動まで、チームプレイと誤解して……。

私が一気に捲<sup>まく</sup>し立てると、平尾は、ただ一言、「今晚は、エエ酒ですわあ」と自慢の口髭を歪め、満面の笑みを見せた。そしてその夜は朝まで二人でシングルモルトを傾けながら、あらゆるスポーツを、個人プレイ、チームプレイ、団体競技、団体行動の4種類に分類することに明け暮れたのだった。

そのとき呑んだシングルモルト2本は、今もそのバーで、二人で一晩で空けた最高記録だという。それが彼の早世の一因でないことを、私は心の底から祈っている。合掌。

（スポーツゴジラ33号より再掲載しました。）

# 夢劇場『馬』

No.17



中村屋の栗まんじゅう

長田渚左

7月24日、競馬評論家の原良馬さん（享年85）が天国に召された。

亡くなる1カ月前にご自宅を訪ねた時は、酸素吸入器を手放せなくなつてはいたが、まだまだお元気だった。いささか言葉は不明瞭だったが「コーヒー取ろうか?」（冷蔵庫を指さして）誰かが持つてきたお酒があるよ」「おなかはすいていないか?」と、細々と気遣つてくださる姿は、いつもと変わらなかつた。

今から35年ほど前、私がスポーツ新聞で騎手インタビューの連載をした時の担当が原さんだった。毎週、茨城県の美浦トレーニングセンターに一緒に通つた。そこで原さんは私を懸命に売り込み、次々と取材する騎手のアポイントを取ってくれた。そして毎週、取材先への手土産、中村屋の栗まんじゅうを用意してくれた。

原さんはいつも口癖のように言った。

「ナギサは女性だから男ばかりの競馬サークルでは良くも悪くも目立つ。だからものすごく気をつけないといけない。ちよつとでも汚点があれば、服に付いたシミ以上に広がつて二度とそれは消えないからね」

取材対象者との距離の取り方にも厳格だった。

「毎週が勝負の世界だから、一つの厩舎や一人の騎手と癒着するように仲良くなるのはご法度。ときには苦言を呈するようなことや、厳しいことを書かなくちゃならないこともある。互いを互いに認め合える距離感を見つけないとね。おべんちゃらばかりを書くような『御用ライター』になんかなつちやダメだ」

原さんの教えを今も私は大切にしている。競馬サークル以外でも当てはまることばかりだったからだ。

原さん、ありがとうございました。心よりご冥福をお祈りいたします。



## バックナンバーのご案内

バックナンバーを、直接お申し込みいただけます。ご希望の号と冊数を明記し、送料分の切手を左記にお送りください。

〒352-0011  
埼玉県新座市野火止8-16-32  
株式会社東美物流  
『スポーツゴジラ』係

送料値上がりのためやむをえず変更しました。  
10冊まで 送料 300円  
20冊まで 送料 600円  
40冊まで 送料1000円  
※特集の内容は本誌巻末カラーページとホームページに記載しています。

### 【ホームページ】

<http://sportsnetworkjapan.com/>

★お申し込みいただくとき『スポーツゴジラ』への感想もお書き添えいただけると幸いです。

次の冬号45号は2019年12月中

旬刊行を予定しています。ご期待ください。

また、バックナンバーは品切表示の号も左記の図書館でお読みにいただけます。ご利用ください。

- 世田谷区八幡山・大宅壮一文庫
- 世田谷区深沢・日体大世田谷キャンパス図書館
- 港区広尾・東京都立中央図書館
- 千代田区永田町・国立国会図書館

### 【理事】

五十嵐二葉（弁護士）／池井優（慶應義塾大学名誉教授）／伊藤順蔵（早稲田大学名誉教授）／岡田匡令（淑徳大学名誉教授）／長田渚左（ノンフィクション作家）／笠原一也（日本オリンピック・アカデミー名誉会長）／佐久間昇二（びあ株式会社取締役）／重村一（㈱ニッポン放送取締役相談役）／永井憲一（法政大学名誉教授）／山口香（筑波大学教授）／山口良治（京都工学院高校ラグビー部総監督）

### 【事務局】

〒359-1192  
埼玉県所沢市三ヶ島2-1579-15  
早稲田大学スポーツ科学部 太田章研究室 気付

皆様、ご存じでしたか？

『スポーツゴジラ』が置かれている都営地下鉄（大江戸線、浅草線、三田線、新宿線）では、ラジオのAM放送を聴くことが可能です。緊急時の情報収集などに役立ちます。

### スポーツゴジラ®

2019年9月10日発行  
第1巻第44号

無断転載を禁じます

企画編集 スポーツネットワークジャパン  
長田渚左・川本凜太郎・阿部雄輔  
波多野圭吾・西本祥子・江川卓美  
平塚貴大・山内亮治・鈴木希人  
制作 有限会社ナトリック  
印刷・製本 図書印刷株式会社  
発行 スポーツネットワークジャパン

お問い合わせは左記まで

特定非営利活動法人

スポーツネットワークジャパン

〒168-0063

杉並区和泉1-40-13-401